

(感想) 多摩川河口の野鳥 第1次～第7次調査の自然の変化

Natural Transition from the First to Seventh Survey of Wild Birds in the Tamagawa Estuary

松原迪郎

Michirou Matsubara

第1次川崎市自然環境調査の頃の多摩川河口は、浮島の巨大コンビナート群が活発に活動していた頃で、左岸の東京都側は羽田空港が2本の滑走路で草地が大きく広がっていた。その後C滑走路の増設の際にA滑走路の位置変更があり現在のようになった。沖に建設中であったD滑走路も2010年中に運用が開始されるので、今後どのような変化があるか見守りたい。右岸の川崎市側は、河口から1.8km程をいすゞ自動車川崎工場が占め、土手と工場の建物の間にネズモチなどの灌木が植えられていた。現在は工場の撤収跡地を造成中だが樹木はまだ完全に植栽されていない。河口干潟の面積はあまり変わらないが、当時は岸から数メートル入ると膝くらいまで泥にもぐる状態であったが、現在は干潟が硬くなり水際近くまで歩いてゆくことができるようになっている。

冬から春

カイツブリ科／川崎市自然環境調査を開始した頃は非常に珍しかったハジロカイツブリ、カンムリカイツブリが、最近では群で観察され、春には夏羽（婚姻色）になった個体も見られるようになった。一方定例調査で2000年には6回観察されたカイツブリが2009年には2回に観察回数が減っている。

カモ科／中州のキンクロハジロ、ホシハジロなどの混群にハシビロガモなど数羽が混じって観察されていたが近年はそのようなことはない。群の中ではホシハジロの数の減少が著しい。第1次川崎市自然環境調査時のホシハジロの平均数（総数/出現回数）105であったが、2007年19.5、2008年11.0、2009年14.1と減少している。また飛来するカモの全数が少なくなっている。

タカ科・ハヤブサ科／魚類が増加したのか近年はミサゴが頻繁に観察される。また羽田空港の工事によるとの説もあるが、トビ、ハヤブサ、チョウゲンボウのほか、定例調査以外ではオオタカ、ハイタカ、ノスリ、チュウヒなどが観察されている。

春から夏

土手沿いの灌木が減ったためか渡りの時期に立ち寄るメボソムシクイ、キビタキなどの小鳥が少なくなり、珍客のニュースがあっても翌日には抜けていることが多くなった。造成中の草地が増加したためかヒバリが増え営巣もしているようだ。

カルガモ／繁殖の時期の子連れのカルガモが減少した。以前は干潟の数箇所でも雛10羽前後を連れた親子の姿が見られたが2010年は河口部で1組見られたただけであった。

コアジサシ／広い造成地や空地が出来てコアジサシの繁殖を期待していたが、求愛活動らしい姿は観察されたが近くに営巣はしなかった。コアジサシは既にコチドリやシロチドリが営巣を始めている場所の近くに営巣することが多い。コアジサシの群に若鳥が増える7月～8月はコアジサシに混じってアジサシが入ることがあるが近年はまったく見られなくなった。

植生の変遷／河口部の堤防補強工事が終わり干潟部分の植物も変わったようである。第4次調査の報告にあった0.8km付近のカジイチゴの群落は殆ど消滅し往時の勢いはない。河口端部土手下50mほどに群生していたハマヒルガオは数株に減少した。実生と思える小さかったオニグルミやモモの樹木は生育し果実を実らせるようになった。多摩川中流域で繁殖し問題となっているアレチウリが、2006年頃から河口でも観察され始め、その後繁殖域を広げている。土手下には河口1.8km付近から大師橋方向に約300mの間桜が植えてあるが、宅地側の土手下の灌木が少なくなったので樹木の下が明るくなってしまっている。

秋から冬

年々沿岸の構築物が増えるためか、カモ類が越冬する場所が定まらない。例年ヒドリガモはこのあたりオナガガモはこのあたりと越冬する群が定住する場所が決まっていたが、どの群がどこに留まるのかいつまでも決まらなくなった。羽田空港のD滑走路工事の関係か近年はスズガモの大きな群が中州近くで越冬する。

ツリスガラ：2000年頃から毎年定例外も含め群が観察されていたが2006年頃から急に少なくなった。

著者紹介

松原迪郎 特定非営利活動法人かわさき自然調査団 野鳥班